

## 引用文献

- 1) STAFLEU, F. A. *et al.* (Editors) (1972) International Code of Botanical Nomenclature. A. Oosthoeks, Utrecht: 1-426.
- 2) 吉田忠生 (1976) 二, 三海藻の命名法上の問題点. 藻類 24: 143-145.
- 3) SAKAI, Y. (1964) The species of *Cladophora* from Japan and its vicinity. Sci. Pap. Inst. Algal. Res. Hokkaido Univ. 5: 1-104.

□ Ralph A. LEWIN ed.: **The Genetics of Algae**. Botanical Monographs Vol. 12. 360 pp. Blackwell Scientific Publications, Oxford. (1976) 価格は邦価にして約9,400円。

その重要性を認識し、近代生物学的手法により藻類の遺伝の研究を最初に行なった学者はパッシャー (A. PASCHER) であるという。緑藻クラミドモナスを用いて彼の研究の成果は1916年に予報として出され、次いで詳しい本論文は1918年に出版された。パッシャーはまた若干の予備的研究結果とともに、緑藻サヤマドロが遺伝の研究に好適な材料であることを述べた論文も同年に出している。スクリプス海洋研究所教授の LEWIN 博士の編集により今回出版された「藻類の遺伝学」には、付章としてこれらの記念すべきパッシャーの論文 (独語) が英文に訳されて掲載されている。また他の付章には、1930~1940年代に華々しい脚光を浴びて登場したメーヴス (F. MOEWUS) のクラミドモナスなどの性決定物質や遺伝に関する一連の研究結果が、戦後追試実験を行なったアメリカのいずれの学者達によっても殆んど再現することができなかつたという、いわばこの学問分野の研究の裏面史的性格をもった内容も盛られていて興味をそそる。さて、13章からなる本文はどうかというと、ここには最近急速に発展を見た藻類の遺伝学がそれぞれの分野の第一線の研究者により総説的に記述されている。内容は藍藻の mutants を用いての遺伝子交換、緑藻クラミドモナスの鞭毛、細胞壁、葉緑体の遺伝などから、ボルボクス類、接合藻類、アオサ、カサノリ、シャジクモなどのメンデル性遺伝学にまで及ぶ。最近、流行語の一つに「藻類の生物学的種の認識へのアプローチ」などがあるが、その方面に興味を持たれる方には本書の後半部はよいガイドの役を果してくれる。

(筑波大学生物科学系 千原光雄)